

認知文法において焦点構造を扱うための枠組みに関する試論

井上優大

京都大学大学院

yd62cl@outlook.com

概要：本論の目的は、認知文法における談話分析の枠組みとして提案されたアクセス・活性化モデルおよびこのモデルに基づく焦点構造の分析の問題点を踏まえ、より適切に談話および焦点構造を分析する枠組みを提示することである。アクセス・活性化モデルはより実際の言語使用の実態に近い形で言語を分析できる枠組みとして提示されたものであるが、言語による情報伝達を、言語表現に含まれる要素を活性化することと捉えているという問題がある。情報としての価値を持ちうる単位は命題であり、そこに含まれる要素の活性化如何は情報伝達の達成にとっては二次的な要因に過ぎない。本論では、命題としての情報の伝達とそこに含まれる要素の活性化との区分を明確にすることで、より適切に言語による情報伝達の営みを分析するための枠組みを構築し、その事例への適用可能性を探る。

キーワード：認知文法、アクセス・活性化モデル、情報構造、談話、活性化、焦点

1. はじめに

認知文法は当初から、文以下の単位を主な分析対象としてきた。文より大きい単位、すなわち談話の分析のための枠組みは Langacker (2001) によって示され、その後も Langacker (2012) や Langacker (2016) など、散発的に談話に関わる現象を分析するための提案がなされてきた。これらの中で、情報構造に関して特に踏み込んだ言及が見られるのは Langacker (2012) である。そこで Langacker は、従来の部分が組み上げられて全体をなすという合成モデルの代わりに、予め想定された全体に順次アクセスし、網羅していくというアクセス・活性化モデルを提案している。このモデルに基づいて談話を分析することで、より実際の言語使用に即したものとして談話を捉えることができるとされる。そして、Langacker (2012) は、アクセス・活性化モデルによって適切に捉えられる言語現象の 1 つとして情報的焦点 (informational focus) を挙げ、その分析の素描を示している。

この Langacker (2012) による情報的焦点の分析には、要素自体の活性化状態の区

別と前提・焦点の区別を混同しており、焦点構造を未だ適切に捉えることができていないという問題がある。本論の目的は、注意のフレームの積み重ねによる情報の提示というより実際に即した談話の分析の枠組みを引き継ぎつつ、言語による情報伝達を要素の活性化と焦点構造の提示からなる多元的なものと捉えることで、より適切に焦点構造を扱おうということを示すことである。

本論の構成は以下の通りである。まず、2節では、Langacker (2012) が提示するアクセス・活性化モデルおよびそれをういた焦点の分析の概要を示し、その問題点を指摘する。3節では、従来の分析の問題点を踏まえ、焦点をより適切に捉えるための枠組みを示す。4節では、本論の枠組みがその分析に有効であると思われる事例についての分析の例を挙げる。最後に、5節において、本論のまとめと今後の展望を述べる。

2. 認知文法における焦点構造分析の枠組み

認知文法は、その当初からの大きな目的の一つとして、言語の諸相を統一的に説明するということを掲げてきた (cf. Langacker 1987, 2008)。しかし、認知文法が主たる研究対象としてきたのは、客観的事態を概念化者がどのように捉えて言語化するかに関わる現象であり、捉えた事態が談話においてどのように整えられ、情報として伝えられるのかという側面はあまり扱われてこなかった。このような、言語による情報伝達に関わる現象が主な分析対象となるには、Langacker (2001) によって現行談話スペース (current discourse space: CDS) の概念が導入されるのを待つ必要があった。CDS の導入により、当該の言語表現そのものの概念的内容を超えて、それ以前や以後の使用場面 (usage event) などの文脈との関わりを分析する方向性が示された。ただし、Langacker (2001) においては、CDS により適切に扱えるようになる言語現象の例として接続詞や日本語のハに代表される提題表現が挙げられているものの、談話における前提・焦点構造をどのように扱うかに関しては特に述べられていなかった。

認知文法において焦点構造を扱うための枠組みを初めて具体的に示した研究は、Langacker (2012) である。Langacker (2012) では、それまでの個々の要素が組み合わせられて全体をなすという「積み木 (building blocks)」のメタファーに基づくモデルを補完し、言語のよりダイナミックな側面を捉えやすくするための枠組みとして、アクセス・活性化モデル (the access-and-activation model) が提示された。「積み木」のメタファーとは異なり、このモデルは、予め伝達しようとする全体をなす要素に順次アクセスし、要素を活性化していくという「飛び石 (stepping stones)」のメタファーに基づくものである。このモデルにより、言語の構造だけ

でなく、処理と談話をもより現実に近い形で捉え、これらを統一的に説明することが意図されている。

以下、本節では、2.1 節においてアクセス・活性化モデルにおいて焦点構造がどのように分析されているのかを示した上で、2.2 節においてその分析の問題点を指摘する。

2.1. アクセス・活性化モデルの概要

従来の認知文法における言語現象の分析は、図1の *Alice admires Bill* という節の分析にみられるように、要素が組み合わせられて全体をなすという「積み木のメタファー」に基づく合成モデルによって分析されてきた。談話を説明対象とした Langacker (2001) の CDS も、談話を先行する使用場面、発話時点の使用場面、後続する使用場面という要素に分解し、それらが全体として CDS をなすという捉え方をしている点で、合成モデルの一種として捉えることができる。

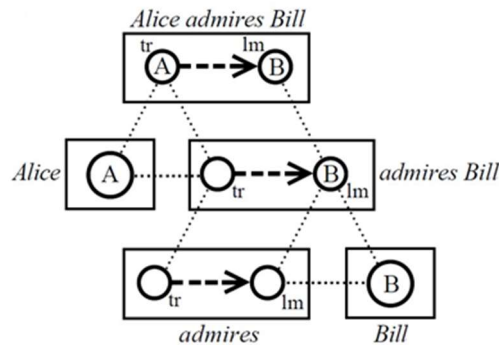


図 1

(Langacker 2012: 96)

これに対して、アクセス・活性化モデルは、話者が予め伝えたい内容全体を想定し、そこに含まれる要素に順次アクセスしていくという「飛び石のメタファー」に基づくモデルである。実際に話者が発話をする際に取っている方略は合成モデルよりアクセス・活性化モデルに近いものであると考えられるため、Langacker は、言語のダイナミシティを捉えるにはこちらのモデルがより適していると述べている。

Langacker (2012) の「飛び石のメタファー」に従うならば、言語表現とは、無限に広がる概念構造 (conceptual structure) から伝えるべき内容が選び出され、それらに特定の順序でアクセスするためのものである。例えば、(1a) の文の発話に際

しての概念構造は図 2 の (a) に示される。これに対し、(1a) の発話によって概念構造に含まれる要素がコード化されていくさまが図 2 (b) に示されている。

- (1) a. // I know a woman // who has a friend // who met a lawyer // who advises Obama. //
- b. // A woman I know has a friend // who met a lawyer. // This lawyer advises Obama. //

(Langacker 2012: 108)

図 2 (b) の角丸四角形は注意のフレーム¹を表しており、そこに含まれる要素を含

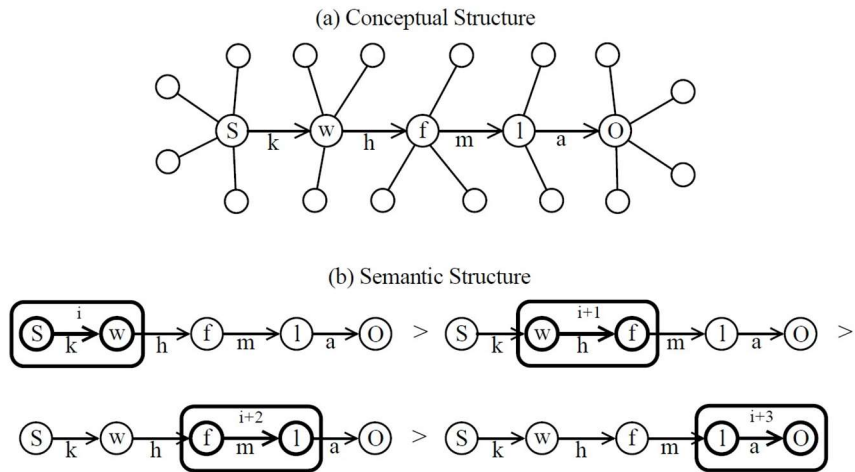


図 2

(Langacker 2012: 108)

めて注意の焦点が当てられていることを太線で示している。それぞれのフレームは、発話時 i のものを基準として、後続するものには $i+1$ 、 $i+2$ とラベルがつけられている (基準より前のフレームには $i-1$ 、 $i-2$ とラベルがつけられていく)。図 2

¹ 注意のフレームは、実際の発話における音韻形式として、Chafe (1994) のいうイントネーション・ユニット (intonation unit) の形をとるものと想定されている。認知の上での注意のフレームとイントネーション・ユニットが実際に対応するかについては疑問が残るが、本論では Langacker (2012) の想定に従い、「注意のフレーム」や「フレーム」という用語を用いる場合、言語としてはそれがイントネーション・ユニットの形式と対応するものとする。

(b) は例文 (1a) に対応するものであるが、(1b) のように、同じ概念構造に異なる順序でアクセスすることも可能である。

当該の概念構造があまりに簡潔でない限り、単一の注意のフレームによって目標となる概念構造を一度に活性化することは不可能である。そのため、上述の「飛び石」のように、注意のフレームを順次移動させ、一定量の情報を活性化していく必要がある。このとき、先行するフレームと情報をどの程度重複させるか (i.e. 既に活性化された要素をどの程度含めるか) には、いくつかの選択肢がある。先行のフレームと全く同じ情報を繰り返し活性化する場合は、新たな情報が全く伝えられないことになり、情報伝達の観点からは非効率的なフレームになる。Langacker によれば、このような効率性を欠く方略がとられうるのは、発話に感情的な力を与えたり、重要性を強調したりするような場合である。一方で、効率を最重要視するのであれば、先行するフレームで活性化された情報と全く重複しない情報を活性化することになる。しかし、こちらは聞き手に完全に新たな情報を処理する負担を与え、前のフレームとの関わりも不明瞭になるという欠点がある。そこで、多くの場合、効率と負荷のバランスをとるため、一部の情報を先行するフレームと被せつつ、残りを新たな情報とするという方略がとられることになる。後述する焦点構造の分析も、既に活性化された情報をもとに新たな情報を活性化するという発話の進め方に関わるものである。

以上のように、アクセス・活性化モデルは、それまでの合成モデルにおける分析が実際の言語の処理とは乖離したものとなっているという欠点を解消し、より言語のダイナミシティを捉えやすくするための枠組みとして提案された。これにより、言語の構造・処理・談話を統一的に説明することが目指されている。

2.2. アクセス・活性化モデルによる焦点構造の分析

アクセス・活性化モデルによってより適切に説明できる言語現象として Langacker (2012) が挙げているのは、情報的焦点 (informational focus)、省略 (ellipsis)、ゼロ照応 (zero anaphora) である。本節では、このうちの情報的焦点について、その分析を概観する。

Langacker (2012) は、情報的焦点を、音韻的にはアクセントを伴い、意味的には新たに活性化された要素であると特徴づけている。前節で触れたように、発話を行う際、話者は先行する注意フレームまでで活性化された要素の活性状態を維持しつつ、新たな要素を活性化しようとする。このときの新たに活性化された要素は示差的な (differential) 要素と呼ばれ、記号 Δ で表される。ここで特徴づけられている焦点構造は、それまでに活性化された要素を背景として、新たな要素を

(示差的に) 前景として活性化するという構造であると考えることができる。Langackerによれば、不活性の状態にある要素を活性化するには既に活性化されている要素よりも強い活性化の力が必要になることが、音韻において強制を伴ってその要素が発話されることに反映されている。

情報的焦点がどのように言語に反映されているかを説明するために、Langacker (2012) は、以下の (2a-b) の例を挙げている。

- (2) a. ALICE ATE the HAMBURGER. She DEVoured it.
 b. While ALICE WASHed the DOG, ANOTHER dog was BARKING.

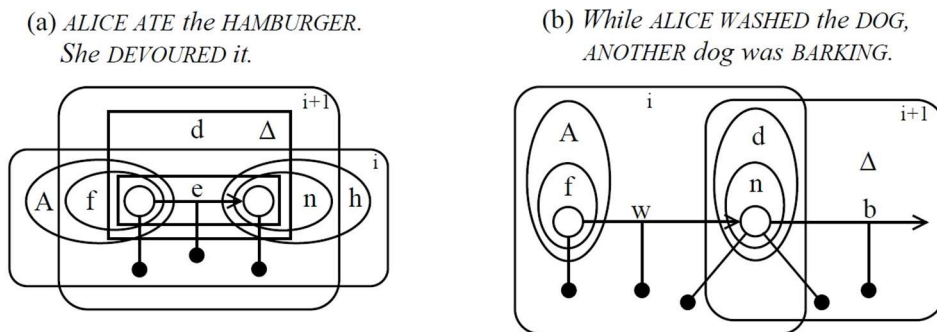


図 3

(Langacker 2012: 118)

(2a) を図示したものが図 3(a)、(2b) を図示したものが図 3(b) である。図 3(a) では、注意のフレーム i において活性状態となった *Alice*、*ate*、*hamburger* の中の *ate* に関して、フレーム $i+1$ ではそれをより精緻化した *devour* が新たに活性化されている²。図中の Δ は、先行するフレームに含まれていない *devour* が示差的な

² 図中の名詞や動詞が多重に円や四角形で囲われているが、これはそれらの要素がどの程度精緻化されて概念化されているかを反映している。名詞は円形、動詞は四角形で囲われ、外側がフレームに含まれているほど、その要素が精緻に概念化されているということが示される。例えば、図 3(a) の *Alice* が指す対象は、フレーム i ではより精緻な *Alice* という表現によって概念化されているが、フレーム $i+1$ では単に女性 (f) であることを示す *she* によって概念化されている。また、名詞を表す円から伸びる線の先に点があるのは、その名詞がグラウンディングさ

要素であるということを表している。同様に、図 3(a) では、フレーム *i* において活性化された *Alice*、*washed*、*dog* のうちの *dog* に関して、フレーム *i+1* ではその概念が指す異なる対象と、その動作である *bark* とが示唆的な要素 Δ として活性化されたということが示されている。

Langacker は、情報の焦点をこのようにアクセス・活性化モデルにおける注意のフレームの移り変わりの中に位置づけることにより、談話の処理に関わる現象である焦点構造をより適切に分析できるとしている。しかし、このように、その要素が単体として新たに活性化されたかどうかをもとに焦点を位置づけることには問題が存在する。次節では、本節で取り上げた Langacker (2012) における焦点構造の分析の問題点を指摘する。

2.3. アクセス・活性化モデルによる焦点構造分析の問題点

一般的な言語学において、新情報と旧情報の区別や前提と焦点の区別および、新情報・旧情報と前提・焦点の両区分がどのように異なるものであるかは、多くの研究の主題となってきた(e.g. Halliday 1967; Clark and Haviland 1977; Prince 1981, 1992; Lambrecht 1994; Gundel and Fretheim 2004, Ward and Birner 2004)。その中で、特に新情報と焦点の関係について、要素として談話上で新たに導入されたものであるということ (i.e. 新情報であること) と、その要素が含まれることによって伝達される情報自体が価値を持つということ (i.e. 焦点であること³) は異なるという指摘がたびたびなされてきた (e.g. Lambrecht 1994; Gundel 1999; Gundel and Fretheim 2004)。焦点は新情報であるという言説が誤りであるということは、以下のような例から示される⁴。

(3) // 昨日田中に会ったんだけど、// 俺の財布を盗んだのはあいつだったん

れているということを表している。

³ このように焦点を定義する研究が多くあることを踏まえ、以下では Langacker (2012) による活性化状態による特徴づけを一旦棄却し、単に焦点という用語を用いた場合はこの意味での焦点を指すこととする。Langacker (2012) における情報の焦点に言及することを明示する際は「情報の焦点」という用語を用いる。

⁴ Langacker (2012) に従い、以降の例文中の // はフレームの区切りを表す。注 1 で述べたように、区切られたフレームはそれぞれ単一のイントネーション・ユニットからなることが想定される。なお、1 つの例が単一のフレームで構成されることが明らかなものには記号を付与しないことがある。

だよ。//

(3) の「俺の財布を盗んだのはあいつだったんだよ」に含まれる「あいつ」は先行する「昨日田中に会ったんだけど」における「田中」に対応するものであり、談話上新たに導入された要素であるとは言えない。そのため、「あいつ」は情報の新旧でいえば旧情報であると考えられる。一方、「あいつ」によって《誰かが俺の財布を盗んだ》⁵という命題の不明点に対して《あいつ (田中)が財布を盗んだ》ということが明らかになるため、「あいつ」は「俺の財布を盗んだのはあいつだったんだよ」における焦点であることがわかる。

以上を踏まえた上で、Langacker (2012) による焦点の特徴づけが情報的焦点であるか否かを要素単体の活性状態から判断している点を考慮すると、Langacker のアクセス・活性化モデルにおける情報的焦点は、前提・焦点構造における焦点というよりむしろ、要素自体が新情報であるか否かに関わるものであると考えられる。このような捉え方は、Prince (1981) が新情報・旧情報の区分の3つの基準の1つとして Chafe (1976) を念頭に置いて挙げている、際立ち (salience) による情報の新旧の区別に相当するものであると考えられる⁶。焦点の捉え方について Langacker (2012) に従うと、(3) のような旧情報 (Langacker の用語でいえば当該の発話時点で既に活性状態にある要素) が焦点であるような事例が説明できない。

加えて、Langacker (2012) による焦点の特徴づけは、Lambrecht (1994) や Gundel and Fretheim (2004) などの焦点に関する研究が捉えてきた談話の処理に関する重要な側面を捉えることができない。(3) の発話の後半を例にとるならば、「俺の財布を盗んだのはあいつだったんだよ」における個々の要素について、それまでに単体として活性されていないものはない(「財布」「盗んだ」は(3)においては初出であるが、「～のは～だ」の形をもついわゆる分裂文における「～のは」の部分は発話の前提となっている必要がある(伊藤 2010) ため、数日前の会話で何者かに財布を盗まれたということが話題にのぼっていた等の文脈が想定される)。2.1 節でみた情報の重複を要素の活性状態のみから考えるならば、この発話には情報の価値がほとんどないということになる。

しかし、(4) の2つ目のフレームのような、ほぼ全ての要素が前のフレームの

⁵ 以下、《》で囲われた節は、実際の発話で明示されるかに関係なく、発話によって(あるいは発話に際して)喚起されるような命題を表すものとする。

⁶ (Langacker 自身も、「活性 (active)」等の用語を用いる際に、Chafe の研究 (Chafe 1987) に基本的に従うと述べている (Langacker 2012: 115)。

繰り返しのようになって情報の価値も乏しいような例と比べると、(3)の「俺の財布を盗んだのはあいつだったんだよ」というフレームは、情報的な価値を多分に帯びているように思われる。

(4) // 今日は焼肉を食べたんだ、 // 焼肉を食べたんだって。//

(3) と (4) の差異には、言語の発話による情報のやりとりが、単に個々の要素を活性化させることを目指す営みではなく、要素の活性化を手段として命題として価値のある情報を与えあうという営みであるということが関わっている。先の(3)における「俺の財布を盗んだのはあいつだったんだよ」も、新たに活性化された要素こそないものの、聞き手にとってそれまで不明であった財布盗難の犯人が明らかになっている点において、価値のある情報である。これに対し、(4)における「焼肉を食べたんだって」は、そのフレームが発話されることによって何かが明らかになるようなものではなく、情報として価値のある発話であるとは言いがたい。このような発話がもつ情報の価値の多寡は、要素の活性度のみに着目しては捉えられないものであり、そのフレームが命題を喚起するものとして発話されることにより、何かが判明するか否かによって捉えていく必要がある⁷。

以上のように、Langacker (2012) による情報の焦点の特徴づけは、焦点を単一の要素の活性状態に帰している点において、焦点を適切に捉えることができていない。また、このような特徴づけでは、価値のある情報のやりとりという言語による情報伝達の重要な側面を扱うことができない。以上の問題点を解消するためには、談話が価値のある情報を伝達することを目標に（あるいは少なくとも目標の1つとして）展開されるということを踏まえ、これを要素単体の活性状態の管理とは異なる軸に据えて談話を分析する枠組みを構築する必要がある。

3. 焦点構造をより適切に扱おうる枠組みの構築

本節では、前節までで見た Langacker (2012) のアクセス・活性化モデルによる情報の焦点の問題点を踏まえ、焦点をより適切に扱うための枠組みを提案する。

⁷ Stalnaker (2002) による、命題によって構成される話し手と聞き手の間の共有基盤 (common ground) を増大させるべく情報の価値のある発話のやりとりを行うというモデルは、本論の観点からすると、(Langacker (2012) のモデルに比して) より適切に言語の情報伝達の側面を捉えたものと言うことができるだろう。

3.1. 談話展開の多元性

先述したように、言語によるやり取りの目的の1つは、価値のある情報を伝達することである。ここでいう「情報」は、命題の形をとるものであり、要素が単体で情報としての価値を持つことはできない。以下の例を考えてみよう。

- (5) a. 黒い猫
b. 目の前に黒い猫がいる。

(5a) のような語句を考えてみた場合、この語句単体からなる発話を行うことで、黒い猫という概念を聞き手の意識に活性化させることは可能である。しかし、その概念の活性化自体が達成されたとしても、それによって聞き手が何らかの情報を受け入れることにはならない。もちろん、「黒い猫」のみによって構成される発話が情報的価値を持つこともありうるが、それは (5b) の発話が喚起する命題と同じような命題が、文脈に応じて聞き手に伝達されている場合に限られる。発話がどのような形をとっていようとも、それが価値のある情報として伝達されるためには、それが何らかの命題を聞き手に喚起するようなものでなければならない。発話によってそこに含まれる要素を聞き手の意識下で活性化させることは、情報の伝達という談話の目的に照らした場合、有用であるとはいえない。

一方で、要素が活性化されているか否かという観点も、言語による情報伝達を分析する上でまったく不要なものであるというわけではない。ある情報を伝達するためには、そこに含まれる要素が何を指すものであるのかについて、両者が見解を揃えておく必要がある。例えば、以下の (6a) に含まれる要素の多くを聞き手が知らない場合、聞き手はこれを容易に受容することができない。

- (6) 中村がかみしんプラザのチヨダでセダークレストを買ったらしい。

それまでの文脈から「中村」が誰で、「かみしんプラザ」がどこで、「チヨダ」が何の店で、「セダークレスト」が何なのかが了解されないまま (6) が提示されても、聞き手は混乱してしまう。これを防ぐには、(6) が表す命題を伝達する前に、それぞれの要素を聞き手が同定可能な形で活性化させておく必要がある。例えば、以下の (7) のようなやり方が考えられるだろう。

- (7) // 中村っていう地元の友達がいる、// 地元のショッピングモールのかみしんプラザってところに入ってる、// チヨダっていう靴屋さんに行った

らしいんだけど、// そこでセダークレストっていうブランドの靴を買ったらしい。//

(7) のような聞き手にとって未知の要素ばかりで構成される情報が聞き手にとって興味のあるものであるかについては疑問が残るものの、このように逐一要素を活性化させながら (6) と同じ情報を伝えることで、(6) のような伝え方よりは滞りなくこれが受容され、後に「この間話した中村が買ったセダークレストは3日でソールが剥がれるような不良品だった」というような情報を伝えるときの背景として用いることができるようになるだろう。このように、伝えようとする情報に聞き手が知らないことが推測される要素が含まれている場合、一口にそれを伝えるのではなく、いくつかのフレームを割いて要素を導入しつつ伝えていく必要がある。

また、聞き手が同定できない固有名詞等が含まれていないような発話についても、当該の談話において聞き手がそれに関わる話をしていると理解していないものについていきなり伝えることはできない。(8) のような例について考えてみる。

(8) a. (開口一番に) 鈴木が昨日この部屋にいたみたい。

b. // 昨日電気が付けっぱなしになってたの、 // 鈴木が昨日この部屋にいたみたい。//

(8a) は、事前の文脈なしにいきなり情報を伝達しようとしている例である。この場合、聞き手は一定の蓋然性を伴った《鈴木が昨日この部屋にいた》という情報をたちどころに受容することはなく、「え、何の話?」というような反応をすると考えられる。一方、同じ内容を伝える場合でも、(8b) のように適切な文脈で発話を行った場合は、すんなりと聞き手に受容されうる。ここでいう「適切な文脈」とは、当該の情報を伝える発話の前提—焦点構造において、前提となる事項が明らかになっているような文脈である。ある情報が価値を持つためには、その情報によって何らかの不明な事柄が明らかになる必要があるが、このときにそもそも「何が不明であるか」が前提として共有されていない場合、聞き手は何が判明したのかを即座に理解することができない。(8b) では、「昨日電気が付けっぱなしになってたの」というフレームによって、《電気が付けっぱなしになっているということは》誰かが昨日この部屋にいた》という前提が共有され、実際に誰が部屋にいたのかについて《鈴木が昨日この部屋にいた》という価値のある情報が伝

達されている⁸。

以上のように、円滑な情報伝達のためには、その情報自体を伝達するためだけではなく、そのいわば下準備として（特に固有名詞について）語句が何を指すのかを明示したり、あるいは当該の発話によって何を明らかにしようとしているのかを明確にしたりするためにも注意のフレームを割く必要がある。Langacker (2012) は、「飛び石」によって概念構造中の要素に順次アクセスして活性化していくという営みを、それによって情報伝達が達成されるものと位置付けていたが、このような要素単体の活性状態の管理自体はむしろ、情報伝達のための手段として主たる役割を持つものであると考えることができる。

情報伝達の観点からは、談話は多元的に展開されるといえる。まず、談話を展開の軸となるのは、価値のある情報を提供するということである。情報を話し手が聞き手に与えて共有することで、その後の談話において、話し手がさらに新たな情報を聞き手に与えるための背景の知識としてそれをを用いることができるようになる。一方で、そのような情報ひとつひとつが円滑に伝達されるためには、どのような事柄について語っているのが明らかにされている必要がある。そのため、核となる情報を伝えるに先立って、必要な要素（あるいは要素からなる前提にあたる命題）を活性化しておかなければならない。注意のフレーム（あるいはそれに準ずる発話の区切り）の積み重ねという一元的な手段によって、一方では新たな情報を伝達し、他方ではそのために必要な要素の活性化を行っているのである。

3.2. 焦点フレームと活性化フレーム

前節でみた情報伝達と活性化という談話展開における注意のフレームの2つの役割を踏まえ、本論では、前者を「焦点フレーム」、後者を「活性化フレーム」として両者に区分を設けることを提案する。

3.2.1. 焦点フレーム

焦点フレームは情報伝達の中核を担うフレームであり、以下のように定義する

⁸ 以上の議論は、Lambrecht (1994) による、語用論的前提 (pragmatic presupposition) と語用論的主張 (pragmatic assertion) から焦点が同定されるという議論に基づいている。「前提」あるいは「何が不明であるか」は語用論的前提に対応し、それに基づいて伝えられる「価値のある情報」として本論で言及している対象は語用論的主張に対応する。

ことができる。

- (9) **焦点フレーム**: それによって、それまでに話者と聴者の間で共有されていない情報が新たに伝達され、両者に共有される知識が増大することが話者によって意図されるようなフレーム。

これ以降、当該のフレームが焦点フレームであることを明示する場合、//^f(発話内容)// という形で表すこととする。「焦点」という用語を用いているのは、情報が新奇なものとして伝達されるためには、適切な前提に基づいて、その前提に新たな要素を結び付けるという構造、すなわち焦点構造 (cf. Lambrecht 1994) をなす必要があるためである。

また、当該のフレームが焦点フレームをなすかどうかは、事実としてそれまでに共有されていない情報を含む発話が行われているかではなく、話者がそれを新奇なものとして伝達しようと意図しているかに依存している。

- (10) a. // 先月大阪に行ったんだけど、//^fたこ焼きは食べなかったよ。//
 b. A: 先月大阪に行ったんだけど、たこ焼きは食べなかったよ。
 B: えっ、じゃあ何を食べたの?
 c. A: 先月大阪に行ったんだけど、たこ焼きは食べなかったよ。
 B: えっ、大阪に行ったの?
 A: うん、先月長めの休みを貰ったから、大阪に行ってきたんだ。
 B: そうなんだ。で、たこ焼きじゃなかったら何を食べたの?

(10a) における焦点フレームは、「たこ焼きは食べなかったよ」である。このとき、話し手は《(話し手が) 先月大阪に行った》という情報を新奇なものとして伝達することは意図していない。聞き手が《(話し手が) 先月大阪に行った》という情報を既に知っているか否かに関わらず、話し手は聞き手がそれを前提として受け入れることを期待し、その前提をもとに「たこ焼きは食べなかったよ」を新たな情報として共有しようとしている。このことは、聞き手は (10b) のように先行するフレームを前提として焦点フレームによって伝達された情報を受け入れ、より新たな情報を聞き出そうとするという談話の流れがごく自然であるということからわかる。一方、聞き手が前提としてそれを受け入れる準備が整っていなかった場合、修復 (cf. Schegloff et al. 1977) が行われ、改めて「大阪に行ってきたんだ」という焦点フレームを介して《(話し手が) 先月大阪に行った》という情報が新た

なものとして伝達されてから談話が進行していくことが考えられる。

3.2.2 活性化フレーム

焦点フレームによって聞き手に情報を伝達するという目的を果たすためには、それまでにその情報が円滑に受け入れられるための準備をしておくことが必要となるということは、3.1 節で述べた通りである。(10) における「たこ焼きは食べなかったよ」に先行するフレームも、そのような役割を帯びたものであるといえる。焦点フレームによる情報伝達に先立って、そのための準備を主たる役割として担うフレームを、本論では活性化フレームと呼ぶ。活性化フレームは以下のように定義される。

- (11) **活性化フレーム**：それによって、聞き手が後続する焦点フレームにおいて伝達される情報を円滑に受け入れるために必要な要素を聞き手の意識下に活性化することが話し手によって意図されるようなフレーム。

活性化フレームを明示する場合は、//^a(発話内容)// という形で表記することとする。

活性化フレームは主たる主張を行うためのフレームではなく、このフレームによって提示される情報は、聞き手に新奇なものとして受け入れられることは期待されない。典型的には、既に共有されている知識のうち、当該の談話において活性化が低下しているものを活性化し、俎上に据えるようなフレームとなる。(12) の前半部分は、そのような典型的な活性化フレームをなしている。

- (12) //^a昨日話してた本、//^f大学の図書館にあったよ。//

(12) は、前日に聞き手が当該の本を探しているという情報が共有されたものの、当該の談話においてはそれまでにその本が話題となっただけではなかった、というような文脈における自然な発話であると考えられる。「昨日話してた本」というフレームによって《昨日話していた本について何かがあった》という前提が活性化され、焦点フレーム「大学の図書館にあったよ」によって《昨日話していた本が図書館にあった》という情報が円滑に伝達されている。このとき、「昨日話してた本」によって当該の本を活性化したことによっては、何らの価値のある情報も聞き手に伝達されているわけではないことに注目されたい。

前節 (10c) で見たように、話し手が情報的価値を持たせることを意図せず、前

提として受け入れられることを期待するような情報を含むフレームであっても、聞き手にとってそれが新奇なものである場合は、焦点フレームを介して再度その情報を受容するプロセスを踏む場合がありうる。このように、そのフレームが情報の価値を持つかは話し手と聞き手相互の了解に基づいて決定されるものである。ただし、多くの場合に分析対象となる、話し手が情報を提示する（聞き手がそれを受容するかを決定する前の）段階の発話に含まれるフレームは、話者の意図に基づいて整理され、提示されている。

また、焦点フレームによって伝えられる情報にとって前提となる要素が全て、活性化フレームによって明示的に活性化されている必要はない。ある内容が前提として機能しうるかに関わるのは、当該の内容を構成する要素の活性状態というよりむしろ、その内容が文脈から予測可能かどうかであると考えられる。例えば、話し手に弟がいるということが聞き手との間で相互に了解されているとき、(13)のように焦点フレームにそれまでの談話で登場しなかった「弟」が含まれていた場合でも、談話はスムーズに進行していくと考えられる。

(13) // ^a今日は俺の誕生日で、// 「弟はネクタイをくれたんだ。//

(13) の焦点フレームは、《弟が誕生日に何かをくれた》という前提に対して《弟が誕生日にネクタイをくれた》という情報を伝達するものであるとする⁹。(13) の焦点フレームにおいて「弟」が初めて現れたにも関わらず、修復が行われずとも談話が進行しうるのは、活性化フレームによって《今日は話し手の誕生日だ》という命題が喚起されることで、誕生日は家族にプレゼントを行うという慣習や話し手の家族には弟が含まれること等の知識と併せて、焦点フレームにおいて喚起される前提である《弟が誕生日に何かをくれた》が予測可能なものとなったことによると考えられる。このとき、活性化フレーム「今日は俺の誕生日で」の発話がなされた時点で《弟が誕生日に何かをくれた》という命題が明示的に喚起されている必要はない。焦点フレームの発話を受けて、聞き手は遡及的に「弟」が含まれる前提を構築し、その前提に基づいて新たな情報を受容していると考えられる。

以上、談話の展開をより適切に分析するための枠組みとして、アクセス・活性化モデルが想定する注意のフレームを焦点フレームと活性化フレームとに区分す

⁹ 《弟が誕生日にネクタイをくれた》という命題全体が焦点となる、いわゆる文焦点の形で (13) の「弟はネクタイをくれたんだ」を解釈することも可能であるが、ここでは考慮しない。

ることを提案した。この区分により、Langacker (2012) によるアクセス・活性化モデルが抱える、要素を活性化することとフレームが情動的価値を持つこととの混同による問題を解消し、より言語使用の実態に即した形で談話を分析することが可能になる。

4. 事例への応用

前節までの議論は枠組みの提示を主眼としていたため、いくつかの事例を提示する際にも、そこに含まれる特定の言語現象に言及することはなかった。本節では、従来から情報構造に関わるものとされてきた言語現象のうちのいくつかを対象として、本論で示された枠組みの適用可能性を探る。

4.1 分裂文

分裂文 (cleft sentence) や強調構文と言われる、1つの命題を複数の節で表現する形式をもつ構文¹⁰は、多くの研究において、焦点構造との関わりから分析されてきた。例えば、Lambrecht (2001) は、分裂文を、関係節ではある項に意味論的役割を割り当て、主節節ではそれに焦点という語用論的役割を付与するものであると分析している。

(14) It is champagne that I like.

(Lambrecht 2001: 467、一部改変)

Lambrecht の分析によれば、(13)における関係節 *champagne that I like* は関係節で表される命題における *champagne* の意味論的役割を明示する役割を持ち、主節 *it is champagne* は、前提となる既知の命題 ‘speaker likes x’ おける変項 x に ‘champagne’ が当てはまる (前提に対して ‘champagne’ が焦点となる) ということを表していることになる。Lambrecht は、英語以外の言語にも射程を広げ、様々な言語において見られる多様な形式の分裂文に対して、意味論的役割と語用論的役割の区別に基づく分析を適用しうることを示している。

この種の分析を踏まえると、分裂文は新奇な情報を聞き手に伝達する焦点フレームをなす形式であると考えられる。一方で、分裂文の形式を持つ文であっても、主節に置かれた項が焦点を表し、それによって聞き手に新奇な情報を伝達しているとは言いがたい事例も存在する。

¹⁰ このような分裂文の特徴づけは、Lambrecht (2001) に従う。

(15) 本日も紹介するのはこのお鍋です。

(14) は、この発話がなされることによって《話し手は今日この鍋を紹介する》という情報が新たに共有され、それがさらなる情報の共有のために用いられる、という種類のものであるとは言えない。むしろ、発話に含まれる「このお鍋」に対し、その後の談話における主題としての立場を与えるような発話であると考えられる。後続する談話として、例えば以下の (15) のように展開していくことが期待されるが、そのような談話における「本日も紹介するのはこのお鍋です」の役割は、むしろ活性化フレームに近いと考えるべきものである。

(16) // ^a本日も紹介するのはこのお鍋です。// ^aこちらのお鍋はステンレス製なので、// ^f汚れや錆びに強くなっております。// ...

ここでの「本日も紹介するのはこのお鍋です」というフレームは、後続する発話における前提をなす要素として「このお鍋」を提示し、後の《この鍋は汚れや錆びに強い》という情報を円滑に伝達するというという役割を担っている。これは、(11) に示した活性化フレームの定義に従うものである¹¹。

4.2 応答表現

ある発話がなされた際の聞き手側からの応答を、当該の発話によって伝達される情報の既知・未知の観点から分析するものとして、森山 (1989) が挙げられる。森山は、「へえ」「なるほど」等の日本語の応答表現について、応答者がその情報を予め持っているか否かに基づいて分類している。

(17) 応答者にもととの情報がない場合

驚き表示類: へええ、ふーん、本当、ふうん、あっ、ほほう

¹¹ 分裂文として主に研究対象となってきたのが事実確認発話 (constative utterance) であるのに対して、「本日も紹介するのはこのお鍋です」のような事例は行為遂行発話 (performative utterance) にあたるものであるという、言語行為の種類 (Austin 1962) の観点からの差異が、本節で述べた分裂文のもつ役割の違いに繋がっている可能性がある。本論では詳しく議論しないが、言語行為と情報伝達の関係についても精査していく必要があると思われる。

導入表示類: あーそう、そうですか／やはり、なるほど、ああ、もっとも、あー そうだね

(森山 1989: 79)

(18) 応答者にその情報が既にある場合

聞き取り表示類: うん、ふん、はい、はあ、ええ、ああ

当然類: もちろん

賛成認定類: その通り、本当本当、そうだ、そうなんだ、そう、ね、全く、(ソウトモのような追認的な終助詞が共起することもある)

(森山 1989: 82)

森山(1989)では、先行する発話との関係という観点から応答表現の分類が行われており、応答者が情報を持っているか否かは並列的に扱われている。これに対し、森山のいう「応答者にもととの情報がない場合」は焦点フレームに対する応答、「応答者にその情報が既にある場合」は活性化フレームに対する応答として捉え直すことで、談話の流れの中で応答表現の役割を有機的に捉えることができると考えられる。以下のような談話を考えてみる。

(19) A: ^a 今日そこのお弁当屋さんでさ、

B: うん。

A: ^f お弁当を買ってみたんだ。

B: へえ。

A: ^a 食べてみたらね、

B: うん。

A: ^f 思ったより美味しくなかった。

B: へえ。

(18) における A の発話において、「今日そこのお弁当屋さんでさ」「食べてみたらね」は後続するフレームによる情報伝達のための前提を喚起する活性化フレームであり、「お弁当を買ってみたんだ」「思ったより美味しくなかった」は新奇な情報を伝達する焦点フレームをなしている。これに対する聞き手の応答はそれぞれ「うん」「へえ」となっている。このときの「うん」は、応答者が直前のフレームを活性化フレームとして受け取り、後にそれに基づいて新たな情報が提示されることへの期待を表明するものであると捉えることができる。これに対し、「へえ」

は直前のフレームを焦点フレームとして受け取った上で、それを受容したことを表明するものであると考えられる。このように、応答表現を前提の喚起とそれに基づく情報の伝達という談話の流れの中に位置づけることで、情報を伝達される立場の応答者がそのような談話の展開に協働的に参与するさまを、より適切に捉えることができる。

4.3 イントネーション

特定の言語形式を離れ、言語の音韻的側面に目を向けるならば、フレームに対応するイントネーション・ユニットごとのイントネーションに、焦点フレームと活性化フレームで差異が生まれるということが考えられる。例えば、以下の(19)の例では、筆者の内省による限り、最後の焦点フレームの抑揚が他より大きくなる。

(20) // ^a隣のクラスにさ、// ^a高橋っているじゃん、// ^aそいつが昨日、// ^f教室の窓を割ったらしいぜ。//

前3つのフレームは、最後の焦点フレームによって伝達される《高橋が昨日教室の窓を割った》という情報が価値をもつための《高橋が昨日何かをした》という前提を喚起する活性化フレームである。これらのフレームの抑揚を控えめにすることで焦点フレームを韻律的に際立たせ、そのフレームによって新たな情報を伝達しようとしていることが明示されていると考えられる。

また、(19)の前3つの活性化フレームは、それぞれの最終音節(「さ」、「じゃん」、「昨日」末尾の「お(う)」)においてイントネーションを上下させることができる。この種のイントネーションは焦点フレームとして発話されるフレームにおいては許容されず、当該のフレームが活性化フレームであり、その内容を前提として、それに関わる何らかの新たな情報が後続する発話において伝達されることを聞き手に予測させるものであると考えることができる。

ここでは内省に基づく直感によって談話の展開と言語の音韻的側面との関わりという観点から分析できると思われる現象の例を挙げるに留めるが、実際の音声データに基づく分析を行い、ここで述べたものをはじめ、より説得的に両者の関わりを論じていく必要があるだろう。

5. おわりに

以上、本論では、認知文法における談話の分析であるアクセス・活性化モデル

による情報構造に関わる現象の分析の問題点を踏まえ、これを解決しうる枠組みを提示した上で、その事例への適用可能性の一端を示した。本論の枠組みは、言語による情報伝達を、従来の要素の活性化のみに着目したモデルに比してより実際に即した形で捉えることができるものであると考えられる。また、Lambrecht (1994) に代表される情報構造に関する研究の多くは、文や節をその分析対象としてきた。注意のフレームの推移というより現実的な言語の処理過程を志向する本論の枠組みからそのような研究の成果を再検討することで、談話に対するより深い知見を提供しうるだろう。なお、本論 4 節では枠組みの事例への応用例を示したが、これはあくまで素描の域を出るものではない。今後、より詳細なデータを用いて情報構造に関わる多様な言語現象を分析することで、本論で示したフレームの区分に基づく分析の有用性をより詳細に検討していくことが求められる。

参考文献

- Austin, John L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford University Press.
- Chafe, Wallace. 1976. Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. In Li, Charles N. (ed.), *Subject and Topic*. 25–55. New York: Academic Press.
- Chafe, Wallace. 1987. Cognitive constraints on information flow. In Tomlin, Russel S. (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*. 21–51. Amsterdam: John Benjamins.
- Chafe, Wallace. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Clark, Herbert H., and Susan E. Haviland. 1977. Comprehension and the given-new contract. In Freedle, Roy O. (ed.), *Discourse Production and Comprehension, Vol. 1*. 1–40. Hillsdale, NJ: Lawrence Earlbaum Associates.
- Gundel, Jeanette K. 1999. On different kinds of focus. In Bosch, Peter, and Rob van der Sandt (eds.), *Focus: Linguistic, Cognitive, and Computational Perspectives*. 293–305. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gundel, Jeanette K., and Thorstein Fretheim. 2004. Topic and focus. In Horn, Laurence R., and Gregory Ward (eds.), *The Handbook of Pragmatics*. 175–196. Malden, MA: Blackwell.
- Halliday, M. A. K. 1967. Notes on transitivity and theme in English, part 2. *Journal of Linguistics* 3: 199–244.

- 伊藤晃. 2010. 『談話と構文』東京: 大学教育出版.
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topics, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud. 2001. A framework for the analysis of cleft constructions. *Linguistics* 39(3): 463–516.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2001. Discourse in cognitive grammar. *Cognitive Linguistics* 4: 1–38.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2012. Interactive cognition: Toward a unified account of structure, processing, and discourse. *International Journal of Cognitive Linguistics* 3(2): 95–125.
- Langacker, Ronald W. 2016. Toward an integrated view of structure, processing, and discourse. In Drożdż, Grzegorz (ed.), *Studies in Lexicogrammar: Theory and Applications*. 23–54. Amsterdam: John Benjamins.
- 森山卓郎. 1989. 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1: 63–88.
- Prince, Ellen F. 1981. Toward a taxonomy of given/new information. In Cole, Peter (ed.), *Radical Pragmatics*. 223–255. New York: Academic Books.
- Prince, Ellen F. 1992. The ZPG letter: Subjects, definiteness, and information-status. In Mann, William C., and Sandra A. Thompson. (eds.), *Discourse Description: Diverse Analysis of a Fundraising Text*. 295–325. Amsterdam: John Benjamins.
- Schegloff, Emanuel A., Gail Jefferson, and Harvey Sacks. 1977. The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 53(2): 361–382.
- Stalnaker, Robert. 2002. Common ground. *Linguistics and Philosophy* 25: 701–721.
- Ward, Gregory and Betty Birner. 2004. Information Structure and non-canonical syntax. In Horn, Laurence R., and Gregory Ward (eds.), *The Handbook of Pragmatics*. 153–174. Malden, MA: Blackwell.

The Cognitive Grammar Approach to Information Structure

Yudai Inoue

The aim of this paper is to modify the access-and-activation model proposed by Langacker (2012), which was brought up to account for the dynamic aspects of language. The problem the access-and-activation model suffers from is rooted in its premise that information sharing is achieved through activating newly introduced linguistic components in the hearer's mind; what matters is managing the activation state of linguistic components of an utterance. However, it is argued that this model cannot offer an adequate explanation on what makes a whole utterance as a proposition informative. This paper proposes a modified version of the access-and-activation model that incorporates the higher dimension of conveying propositions, and introduces "focus frame" and "activation frame" as subclasses of frames of attention. The application of the proposed model is shown by brief analyses of some information-related phenomena such as cleft-sentences.